

エペソ人への手紙 1 章 3-14 節 「豊かな教会生活」

1A 天にある霊的祝福 3

2A 三位一体の神 4-14

1B 父なる神 4-6

2B 子なるキリスト 7-12

3B 聖霊 13-14

アウトライン

おはようございます。今日はいつもの聖書通読の学びから離れて、キリスト者の基本的な学び、神の教えと真理について学んでみたいと思います。エペソ人への手紙 1 章を開いてください。1 章 3 節から 14 節までをお読みします。

3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。

4 すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。5 神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ決めておられたのです。6 それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。

7 私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。8 神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、9 みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになったご計画によることであつて、10 時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあつて一つに集められることなのです。このキリストにあつて、11 私たちは彼にあつて御国を受け継ぐ者ともなつたのです。私たちは、みこころによりご計画のままをみな実現される方の目的に従つて、このようにあらかじめ定められていたのです。12 それは、前からキリストに望みをおいていた私たちが、神の栄光をほめたたえる者となるためです。

13 またあなたがたも、キリストにあつて、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であります。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。

皆さんが教会にいらして、何らかの願いや目的がおありかと思えます。私はある方が、聖書の言葉をたくさん聞いたのちに、「心が豊かにされました」というお言葉を私にくださいました。心が豊かにされる、というのは教会に来る大きな動機付けになりますね。教会に来てまさか、物質的な富が蓄えられるとは思っておられないと思います。皆さんは、他に何を理由にしていましておられるでしょうか？

エペソ人への手紙は、まさにキリスト者が豊かにされていることを使徒パウロが、ありったけの真理の言葉で教えている書物です。エペソという町は、今のトルコ、小アジアにある貿易中継都市でした。トルコの西岸の港を持ち、東から来る貨物を載せ換えて、新たにローマに向けて出荷していました。当時はローマ帝国の時代です。世界の中心はローマであり、東洋とローマをつなぐ重要な役目を果たしていました。したがって、貿易によって豊かにされていたところでした。そこにパウロがやって来て、イエス・キリストの福音を伝えました。大勢の人がイエス・キリストを信じました。そして、人々が癒されたり、悪霊が追い出されたり、苦しみの中にいる人々も解放されていきました。彼らは物質的な豊かさは享受していましたが、ここで心の豊かさ、もっと正確にいうならば霊の豊かさを味わうことができたのです。パウロは、「あなたがたは、キリストにあって豊かな者である。そして教会は、このキリストが満ち満ちておられるところだ。」とこのエペソ書で教えています。

私は説教題を「豊かな教会生活」としました。教会生活が豊かになってほしいと願います。教会に比較的定期的に通っておられる方なら、教会生活を豊かにするためにはどうすればよい、あるいはどうあればよいとお考えになるのでしょうか？お祈りをもっと多くすることでしょうか？聖書の学びをもっとたくさん行なうことでしょうか？伝道をもっとすることでしょうか？奉仕や活動にもっといそむことでしょうか？

パウロは、この手紙を、「神がキリストにあって私たちのために何をしてくださったか」について書き始めています。今、読んだ箇所をもう一度見てください。「神はキリストにおいて・・・」「神は、キリストのうちに選び」「神は、愛をもって私たちをあらかじめキリストにおいてご自分の子にしようと定めておられた」どんどん読み進めてみてください、どこかに、「私たちがすべきこと」が書いてあったでしょうか？いいえ、どこにも書いていませんでした！4章1節を開いてください。「さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。」ここは、「勧めます」そして「歩みなさい」という言葉で始まり、初めて私たちキリスト者がすべきことが書いてあります。実に、1章から3章の終わりに至るまで、神がキリストにあって行なってくださったことに終始しているのです。そして4章になってから初めて、私たちがキリストにあって行うべきことが書いているのです。

実は聖書にある物語はすべて、「神が人に対して何をしてくださったか。」あるいは、「何をしてくださっているか」が中心に描かれており、神が先んじて私たちに恵みを施してくださっているのです。そして私たち人が行なう事は、神のしてくださったことに応答するという責任があります。けれども、

その反対ではないのです。私たちが神に対して何かを行ったから、神が私たちに何かをしてくださる、という人間中心ではありません。神が私たちのためにしてくださり、私たちがそれに反応、そして応答するという神中心なのです。聖書の初めの言葉が、「初めに神は、天地を創造された。」から始まります。

そして、教会生活でもう一つ大切なのは、「キリストにある」ということです。今読んだ箇所をもう一度見てください。「神はキリストにおいて」「キリストのうちに選び」「イエス・キリストによって」「御子において」「キリストにあって一つに」「キリストに望みを置いていた」このように、パウロが語っている豊かさや祝福は、キリストから離れては何ひとつ存在しない、ということです。

ですから、私たちの信仰生活が、神が自分に何をしてくださったか、ということだけでなく、キリストにあって何をしてくださったか、ということでもあります。もっと平たくいうならば、「キリストを知ること」です。イエス様は、「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。(ヨハネ 17:3)」と言われました。永遠の命を聞けば、自分の今の命が永遠の続くことを考えます。違います、イエス様は神とイエス・キリストを知ること、この方を霊的に、人格的に知ることそのものが永遠のいのちだと言っているのです。

ですから、私たちキリスト者の生きている目的、そしてキリストの教会の目的は、キリストを見つめ、この方をじっくりと見、この方に触れて、この方の内において、キリストをじっくり体験することに他なりません。この方が自分にとっての全てになる、この過程こそが永遠のいのちであり、私たち教会の目的なのです。

1A 天にある霊的祝福 3

では、三節をご覧ください。私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。

これが3節から14節までの主題です。パウロは、主をほめたたえています、この賛美あるいは頌栄が、14節まで続きます。彼は、一度、神をほめたたえる口火を切ったらやめることができませんでした。日本語訳では、いくつもの文章に切っていますが、ギリシヤ語では一文になっているのです。

先ほどから話していますように、主題は、「神がキリストにおいて、私たちを祝福してくださったこと」です。大事なことは、この祝福の時制が過去形、あるいは完了形になっていることです。これから祝福してくださるのではなく、既に祝福してくださったのです！私たちは大胆に、こういうことができています。「私たちはキリストにあって到達しました。」まったき平安を得ました。言葉に言い尽くせない喜びを持っています。愛の深さ、高さ、長さ、広さを知っています。自分はいくら以上、もっと正しくなることはできません、キリストにあって完全にされたのです。もちろん、もっとイエス・キリストの知

識と恵みにおいて成長したいと願います。けれども、それは今のまったき平安を否定するものではないのです。今、キリストにあって全てである、と大胆に言うことができるのです。

この、とてつもない祝福、無尽蔵の富をすでに持っています。ですから、私たちの礼拝の時間が、これまで持っていなかったものをいただくところではありません。そうではなく、神は御霊によって既に備えておられる祝福を私たちに啓示して、そこにある神のご臨在に浴する時間であります。

そして、どのような祝福でしょうか？「**霊的祝福**」です。物質的な祝福ではありません。神の霊による祝福です。神の霊によらなければ、これらの祝福は決して分かりません。だから、私たちは絶対に、御霊を強調しないでおられません。ご聖霊に満たされましょう。この方を心から求めましょう。神の霊に飢え渴き、この方が私たちに力強く臨んでくださるよう祈りましょう。この方がおられなければ、神について、キリストについても、そしてその祝福について知る由がないのです。

さらに、これら御霊の祝福は「**すべて**」与えられています。先ほど申し上げたとおりです。キリストにあってすべて得たのです。この方がおられれば、すべては完成したのです。

さらに、これらの祝福は「**天にある**」ものです。地上のものではありません。「天」という言葉を聞く時に、何を連想しますか？空よりも高いところ、でしょうか？死んだ後に行くところ、でしょうか？聖書において、確かに天は非常に高いところにあると書いてあります。死んだ後に天に引き上げられることは確かです。しかし、天というのは、もっと本質的なことは「神が王として玉座におられるところ」であります。天地創造された方が王としてその玉座に着いていて、その王にひれ伏しているときに、私たちは本質的に天の中に入っているのです。

教会はいわば、「天と地の交差点」であります。天という道路が、ちょうど地という道路と交差するところ。教会で祈られるのは、「天でみこころが行なわれるように、地でも行なわれますように」であります。私たちは天の御国を教会において前味を楽しむことができます。

2A 三位一体の神 4-14

そして、具体的に神がキリストにあって祝福してくださったことを見ましょう。4節から14節までですが、ちょっと注目してほしい言い回しがあります。6節、「**恵みの栄光が、ほめたたえるためなのです**」、12節、「**神の栄光をほめたたえる者となるためです**」、そして14節、「**神の栄光がほめたたえられるためです**」とあります。主をほめ歌っている、難しい言葉では頌栄しています。

そしてここに、三位一体の神の働きが鮮やかに出ています。4節から6節までには、父なる神がキリストにあってしてくださったこと、そして7節から12節はキリストが行なわれたこと、そして13-14節は聖霊が行なわれたことです。もっと具体的には、4-6節までは、父なる神が私たちのために計画してくださったことが書かれています。7-12節には、キリストがその計画に基づいて実行

してくださったこと、またこれから実行して下さることが書かれています。そして 13-14 節には、聖霊がその約束を保証、また確認して下さっている、という働きがあります。

1B 父なる神 4-6

4 すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。5 神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。6 それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。

父なる神が私たちに行なってくださったのは、私たちを愛して、キリストのうちに選んでくださったことです。どうか、この神の愛に浴してください。よろしいですか、神が私たちを選ばれたのは、私たちが何か良いことを行なったからではありません。何と書いてありますか、「世界の基の置かれる前から」とあります。神は、私たちの行い、また世界で起こっていること、これらのものによって全く影響されることなく、全く影響がないことを強調するために、あえて世界の基が置かれる前から選んでおられました。ですから、主はこの世界が滅び去ろうとも、しっかりと握りしめてくださる愛です。「世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。(1ヨハネ 2:17)」だから、キリスト者は不動なのです。どんなことが起ころうとも、決して離れることのできない愛で、神と結ばれています。

そして、「御前で聖く、傷のない者」にするために選ばれた、とあります。聖い、というのは、別たれるという意味ですが、他のものから別たれて、神のものとなる、という意味です。傷のない者は、欠陥のないものという意味です。どちらも、イスラエルの民が動物をささげるときに、欠陥のないもの、傷のないものでなければならぬと命じられていました。つまり、神が私たちをそれらのいけにえと同じように、拒むのではなくしっかりと受け入れてくださる、という意味です。

そして「子にする」というのは、ここでは養子縁組にするという意味です。キリストと神は子と父の関係ですが、その関係の延長を養子縁組によって、信じる者に与えてくださるということです。そして子となる特権は、一つは、父子にあるような親密な、人格的な交わりを持つことができます。「アバ」つまり「パパ！」という小さな子がお父さんと呼びかける言葉です。そしてもう一つは、父のものを相続するということです。これがとてつもない特権であり、神の国を相続するようになることを教えています。

そして栄光が神に帰されますが、大事な言葉は「恵みの栄光」です。私たちにはまったく受ける価値がないのに、それでもこの大きな特権を与えてくださいました。したがって、これは恵みです。そして恵みによるときに、初めて栄光は神に行きます。神の栄光は、私たちを恵みで支配されているときに初めて現れます。

2B 子なるキリスト 7-12

7 私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。

私たちの受けている霊的祝福の土台は、ここにありますね。「御子の血による贖い」です。「贖い」という言葉のギリシヤ語はいくつかありますが、ここでは奴隷市場で売られていた者を、代価を払って解放する、という意味があります。黙示録 1 章 5 節には、「その血によって私たちが罪から解放し放ち」とあります。その解放とは何でしょうか？初めに、罪の責めからの解放です。「罪の赦しを受けた」とあります。リストカットによって自分を傷つける人がいます。しかし、リストカットどころか、釘をご自分の手と足に刺し通すようなことをお許しになった方がすでにおられるのです。罪から来る罰を、私たちが受けなければいけない罰を、すでに神はキリストにあつて受けてくださいました。ここに、神の恵みの豊かさがあります。

8 神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、9 みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになったご計画によることであつて、10 時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあつて一つに集められることなのです。このキリストにあつて、11 私たちは彼にあつて御国を受け継ぐ者ともなつたのです。私たちは、みこころによりご計画のままをみな実現される方の目的に従つて、このようにあらかじめ定められていたのです。12 それは、前からキリストに望みをおいていた私たちが、神の栄光をほめたたえる者となるためです。

「みこころの奥義」とあります。そして、それが「あらゆる知恵と思慮深さをもって」立てられた計画であるということです。ここでいう奥義とは、日本語の示している意味とは異なります。3章5節にこう書いてあります。「この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。」奥義といつても、それは昔に隠されていたものという意味であり、今も秘密にされているものではありません。むしろ、今の時代のために昔から計画し、企画し、そして明らかにされた、という意味です。

私たちが、なにかを企画するとき、ここに書かれているようにあらゆる知恵と思慮深さを用いると思います。私にとっては最近のイスラエル旅行の企画をさせていただきました。単に連れて行くのではなく、どの視点から、どのようなものを見せるのかが大きな課題です。そして、その視点から見えるものが見えるようにするために、どのような備えが必要か、ひっきりなしに考えていました。ぶつ切れのアイデアではなく、一つの流れとして連鎖していくものとして考えました。

これを神は、人類の歴史において壮大なご計画の中で行われました。カルバリーチャペルで行なわれている聖書通読による礼拝は、その醍醐味を味わえる方法でしょう。なぜなら、神のご計画

の現われを初めから順番に辿ることによって、その知恵と思慮深さを垣間見ることが出来るからです。神は初めに、イスラエルをお立てになりました。ご自分の民を造られて、契約を結ばれて、そしてこの民によって、世界にご自分を証しされようとしてしました。しかし、神は同時に、彼らが不従順になることも知っておられました。そこで神は、その不従順を用いて、今度はイスラエルではない民、つまり異邦人に救いをもたらすように定めておられました。そしてその異邦人を用いて、今度はユダヤ人たちにねたみを起こさせ、彼らが救われるように定められました。このことが完成するのは、キリストが再び来られるときです。

そしてその目的とするところは、キリストにあって、天にあるものも、地にあるものも、一つに集められることであります。キリストを王とした神の国を立てるところにあります。キリストの再臨があって、「そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。(1コリント 15:24)」とあります。そして驚く事は、すべてが集められ一つにされたその国を、「私たちが相続する」ということなのです。パウロは、これがユダヤ人だけでなく、異邦人にも信仰によって与えられている、と論じるのです(ローマ 4:16)。

3B 聖霊 13-14

13 またあなたがたも、キリストにあって、真理のことは、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であります。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。

ご聖霊の働きについての頌栄です。先ほどから、神のみこころによって、キリストにある選びによって私たちが神の子どもとなり、相続人となったという流れでしたが、それは私たちが信じるという行為を否定するものではありません。ここにあるように、キリストにある真理の言葉、救いの福音を聞いて、聞いた後に信じることによって、初めて自分のものになります。

そして「証印」という言葉があります。これは、エペソが貿易中継都市であったことと深く関わっています。「証印」というのは、かつて、貿易の貨物がだれのものであるかを明らかにするためのスタンプでありました。今のように紙のラベルに印刷するのではなく、蠟(ろう)があって、自分の指輪の印を、まだ柔らかい蠟に押しつけました。それが固まったのが証印であるわけです。

エペソにおいて、貿易商人たちは、自分たちが売るための商品を梱包して、それから「証印」を押しました。これが自分たちのものであることを、こうして証明したのです。積荷された船は次に、コリントの町を通過して、イタリアのポテオリという港町に行きます。ポテオリからローマは近くにあり、この港からポテオリで積荷は降ろされますが、そのときに、どの荷物がだれの所有か証印によって判断するのです。貿易商人は使いを送って、自分の荷物を探させます。その使いは、「あった、あった！」と言って、主人の指輪の証印と、ろうそくの型のある印の跡と照合した荷物を持ってくるの

です。

パウロは、エペソにいる人たちがよく知っている、この出来事を用いて、神の贖いのご計画について説明しているのです。私たちは、この貿易商人の商品であります。貿易商人、つまり所有者は神でありキリストです。私たちが、救いの福音を聞いて、信じたときに、神は私たちに、私たちがキリストのものであることの証印を押してくださったのです。それは、目に見える証印ではありません。神の聖霊ご自身が、証印となってくださっているのです。

私たちはちょうど、証印を押されて、ポテオリに向かっている貨物のようであります。まだ所有者のものとなっていません。しかし、証印があるので、確かに所有者の手の中に入ります。その時が待ち遠しいです。所有者が、「これはわたしのものだ。」と言ってご自分のものとされる時が近いのです。このように、ご聖霊は、私たちが神の子どもであり、キリストによって贖われていることを確認してくださるのです。

そして「保証」というのは、「手付け金」とか「頭金」と訳すことができます。高い買物をするとき、自分が必ずそれを購入することを確かにするために、手付け金を払いますね。例えば家やマンションを買うときは、売主と買主の間で契約を結びます。そのときには、買主は購入代金の一部を売主に払います。それは、買主が、他の良い物件が見つくて、それに乗り移ってほしくないからです。買主が買うと言っているのに、その間、他の人には売らないようにしておきます。けれども、途中で気が変わって、契約をキャンセルしたら、その間に本当は他の人が買ったかもしれないその機会を失ってしまいます。ですから、手付け金を受け取って、確かに買主が購入を完了させる保証としているのです。

そして、パウロは、聖霊が、この手付け金であると言っています。神が私たちに贖ってくださるのですが、本当に贖ってくださることを保証するために、その祝福の一部を、私たちに与えてくださったのです。私たちが今得ているのは、神が与えてくださるところの祝福のごく一部です。ご聖霊によって、私たちに平安が与えられ、キリストの愛によって満たされ、言葉で言い表すことのできないほどの喜びに満たされ、私たちは、ああ、なんと祝福されているのであろうかと思えます。けれども、それは頭金でしかないのです。天における祝福のほんの少しなのです。ですから、神の御国がいかに栄光に富んでいるものであるかを、知ることができるのでしょう。

いかがでしょうか？あまりにも盛りだくさんで、食べきれないという気分ではないでしょうか？だから私たちは、一つ一つ感謝して受け取り、咀嚼し、思い巡らし、そしてこれをいかにこの地上で具体化するのかを神の知恵によって考えていくのです。これが教会生活です。これが中心になっていさえすれば、私たちは根本的なところで悩むことはありません。